井上円了とソクラテス

柴田隆行
shibata takayuki

一　四聖としてのソクラテス

井上円了が四聖の一人としてソクラテスを選んだことは周知のことであるが、選択の理由は必ずしも明確ではない。「井上円了と西洋思想」と題する論考を書かれた福鎌忠恕氏は、「ソクラテスが『聖人』として選ばれた理由は理解に難くない」とし、その理由は「ソクラテスこそ『哲学』（philosophy）の元祖であり、この用語と、この学問の創始者その人であった」からだと言う(1)。しかし、福鎌氏のこうしたソクラテス理解の正当性も問われなければならないが、井上円了がソクラテスを聖人の一人に数え上げている理由はさほど単純なものではない。この小論では、ソクラテスを四聖として選んだ井上円了の真意を明らかにしたい。

まずは井上円了がソクラテスを四聖の一人に選んだ理由を述べている箇所を読もう。その理由として、一九〇二年の『哲窓茶話』で三つ挙げられている。

哲学者を選ぶ際に古代にあってはアリストテレスを選ぶ者がいるが、自分はソクラテスを選ぶ、と円了は言う。その理由は、自分が四聖として選ぶ他の孔子、釈迦、カントとともに、「いずれも哲学の中間に起こりて、前歴史を統一し、また後歴史を開成したるもの」であり、「中興の主とすべき」だという点にある（2:102）(2)。

一八九九年の『通俗講談言文一致哲学早わかり』でも、古代哲学は「紀元前四〇〇年代に世に出でたるソクラテス氏を中興」とするがゆえに、ソクラテスを四聖の一人として選ぶ、と書かれている（2:49）。哲学の元祖だとか古今東西の哲学の創始者だとかではなく中興者であることが、井上円了が四聖を選ぶ理由としてまず第一に挙げられている。だがなぜ中興者なのか？　その理由はここでは説明されていないが、前掲の「前歴史を統一し、また後歴史を開成し」という一節にこの問題を解く鍵があると思われる。詳しくは追って述べる。ここでは、四聖選択の他の理由を先に聞こう。円了はつぎのように説明を続ける。

> 私が孔子、釈迦、ソクラテス、カントの四聖を選んで、これを尊崇するゆえんのものは、単に学者としてこれを尊崇せるにあらず、人物としても、知者としても、知徳完備の人として大いにすぐれたところがあるからである。その知なり、行いなり、今に残されておる高恩は、実に感佩すべきものがあるのではないか。（2:114）

たんに学者としてだけではなく人物としても尊崇に値する人、すなわち「知徳完備の人」が、四聖を選ぶ二つめの理由として挙げられる。

西洋古代哲学の創始者と一般に言われているのは、「万物の根源は」という発想を人類史上初めて持ったとされるタレスか、「私」について人類史上初めて語ったとされるヘシオドスであり、あるいは、「哲学」の語源であるフィロソフィア（愛知）を初めて自覚的に語ったとされるピュタゴラスも候補として挙げられる。あるいは、哲学を哲学として書き残したプラトン、それを体系として構築したアリストテレスも、西洋古代哲学の代表者と

されるに十分な資格があるであろう。しかしながら、円了が四聖の条件として挙げる「知徳完備の人」、東洋大学の標語を借りるならば「知徳兼全」の人としては、たしかにソクラテスが一歩先んじるかもしれない。この点の検証を、井上円了のソクラテス理解に即して行うことにしよう。その前にもう一点、円了の四聖選択の理由を確認しておきたい。円了はさらに続けてつぎのように述べる。

> 吾人が平素尊崇しているところの孔子、釈迦、ソクラテス、カントの四聖は、共に唯心論者である。すなわち釈迦の大事業をなして、万世ののち、赫々たる光明の下より、尊敬さるるゆえんは全くこの唯心の理を信じて、これを事業に努めしによることは疑いない。孔子も常にこの心を根基として、心正しければ身修まり、身修まれば家斉う、家斉えば国治まり、国治まれば天下平らかなりとまでいっておる。ソクラテスの当時においては未だ唯物だの、唯心だのという説が判然と区別のないときであったが、氏が知すなわち徳なりといいし一言は、純然心を本とせしもの、すなわち唯心論者なることを知るに足る。カントは近世唯心論の祖である。(2:159-160)

円了の四聖選択の三つ目の理由は唯心論者であることにある。聖人は「唯心論者でなければならない」というのは井上円了の思想に属することがらであり、ここでその是非は問わないが、ソクラテスが唯心論者であるかどうかについては検討の余地がある。しかし、それはプラトン哲学の検討も含めて別途専門的に論究すべきことがらであるので、ここでは扱わないことにする。

二　中興の主としてのソクラテス

円了が選んだ四聖はいずれも哲学中興の主であるとされる。折々耳にする「ソクラテスこそ哲学の元祖」とする理解の是非は、事実問題よりも「哲学」をどのように理解するかという認識問題に関わるので、これを問うことは容易ではない。通常哲学史はタレスから書き始められている。その際の共通認識とされているのは、哲学は「理性的な認識としての学的性格をもつ」（『広辞苑』）ことであり、タレス以前のいわゆる賢人たちの教えや神話とはその点で区別される。たしかに、賢人の教えや神話に、「万物の根源は」という発想は見られない。この発想は「理性的な認識」をともなわなければ生まれないかもしれない。

円了は哲学史講義（『哲学要領　前編』一八八六年）で、「ギリシア哲学はタレス氏をもって始祖とす」るが、「その以前すでに諸学の思想を胚胎するあり」（1:109）と述べている。タレスが哲学の始祖であるならば、なぜタレスが四聖に選ばれないのか。

タレスの時代にはまだ「哲学（philosophia）」という言葉がなかったから、という理由も折々耳にする。ならば、philosophia という言葉は誰が作ったのか。円了は『純正哲学講義』（一八九一年）でこう述べる。

> 哲学の名称はフィロソフィアを原語とし、ギリシアより起こり、碩学ピュタゴラス氏始めてこの語を用うという。（1:220）

円了と同様に仏教徒として西洋哲学を同時代に学んだ清沢満之も、全集編者により「西洋哲学史試稿」と名づけられたノートに、「『フィロゾフィー』ナル希臘ハヘロドトス氏初メテ用ヒタリ　其学問的ノ使用ハピサゴラス

氏ニ始ルト云フ」（『清沢満之全集』第四巻、岩波書店二〇〇三年、四頁）と書いているが、こうした認識は現代でもそのまま通用する。

ヘロドトスの『歴史』（紀元前五世紀）の巻一に、クロイソス王がソロンに呼びかけた言葉「知識を求めて（philosopheon）広く世界を見物して廻られた」があり、ツキュディデスの『ペロポンネソス戦役』（紀元前五世紀後半）にも、ペリクレスの演説中に「知恵を愛して（philosophoumen）しかも文弱に堕せず」という言葉が見られる。ピュタゴラスは書物を書き残していないので正確なところは不明だが、ディオゲネス・ラエルティオスの『ギリシア哲学者列伝』（紀元後三世紀前半）によると、「哲学という語を最初に用い、また自らを哲学者と呼んだ最初の人はピュタゴラスであった」（第一巻序章）という。ピュタゴラスは、知恵のある者は神のみであり、自分たちは「知恵を熱心に追求する人」つまり「哲学者」であると述べたと記されている。これはまさに、無知の知としての愛知を説いたとされるソクラテスの考えと同じである。ピュタゴラスは紀元前五八二年から四九六年に生きた人（詳細不明）であり、ソクラテスは紀元前四六九年から三九九年に生きた人であるから、ピュタゴラスのほうがこの言葉を使った先人である。しかし、ディオゲネス・ラエルティオスの記録は紀元後三世紀のものであるから、後知恵かもしれない。いずれにせよ、われわれにとって大切なことは、井上円了も清沢満之も、philosophia をめぐるこうした哲学史の正確な知識を持っており、ソクラテスこそが「哲学」の元祖だと単純に言っているわけではないことを確認することにある。

「哲学」という言葉を最初に使ったのは、意図的ではないにしろ、ヘロドトスかツキュディデスであり、また、それを「愛知」という意味で最初に使ったのはピュタゴラスであり、井上円了はそのことを知っていた。したがって、ソクラテスが哲学の元祖であるから聖人の一人として選んだわけではないことは明らかである。清沢満

之は四聖を選ぶようなことはしていないが、彼が一八八九年から一八九四年に真宗大学寮で行った西洋哲学史講義ではタレスから始めている。その理由として「此の人を哲学の鼻祖とする故は、氏が万有を解釈するに当りて、初めて神話的、神学的の見地を捨てたるに依る」（前掲全集、第五巻、九頁）とある。これは哲学史の常道であり、古代哲学を六期に分け、第一期「ソクラテス氏前哲学」、第二期「ソクラテス氏及び不完全ソクラテス学派」というように、ソクラテスを一つの時代区分に使うのも常道である。ただし、清沢満之が古代哲学の第三期を「希臘哲学全盛時代」としプラトンとアリストテレスを取り上げるのは必ずしも哲学史の常道とは言えない。いずれにせよ、井上円了が古代ギリシア哲学者のなかでもソクラテスを重んじていることは、彼なりの意味づけがあったのであろう。

なお、清沢満之の古代哲学史区分に見られる「不完全ソクラテス学派」とは、いまではどの哲学史でも「小ソクラテス派」と呼ばれている学派を指す。「小」というのは主観的な感じを受けるが、偉大なソクラテスの一部分を受け継いだにすぎないからだと言われる。この表現が誰によって作られたかは不明だが、一九一六年刊の安倍能成『西洋古代中世哲学史』には見られ、そこに die kleinsokratische Schule とドイツ語が記されていることからも察せられるように、安倍は Hans von Arnim の *Die europäische Philosophie des Altertums* を基礎としてこれを書いている。しかし、アルニムの著作に「小ソクラテス学派」という言葉は見つからない。さらに遡って調べても、Johann Jakob Brucker, *Historia critica philosophiae.* 1742 はもちろんのこと、Dietrich Tiedemann, *Griechenlands erste Philosophen,* 1780、Johann Gottlieb Buhle, *Lehrbuch der Geschichte der Philosophie und einer kritischen Litteratur derselben,* 8 Bde. 1796-1804、Wilhelm Gottlieb Tennemann, *Geschichte der Philosophie,*

12 Bde. 1798、あるいはヘーゲルの哲学史講義や一九世紀後半のユーバーヴェークやヴィンデルバントに至るまで主だった哲学史のいずれにもこの言葉は使われていない。「小」より辛口の「偽ソクラテス学派(Pseudosokratiker)」とか「戯画化されたソクラテス(karikirter Sokrates)」とかといった表現は一八三九年のFriedrich Schleimacher, *Geschichte der Philosophie* に見られる。そして、清沢満之が使った「不完全ソクラテス学派」という表現は、井上円了が一八八三年秋に作成した学習ノート「稿録」に記述されているシュヴェーグラーの『哲学史ハンドブック』にも見出すことができる。清沢満之と井上円了はそのころ、東京大学哲学科でフェノロサのもとでシュヴェーグラー哲学史の英語訳を読んでいた。一八六八年にJames Hutchison Stirlingによって英訳されたこの哲学史には、たしかにThe Incomplete Socraticsという語が見られる(p.53)。清沢満之によれば、不完全学派の一つは「師の行為を見たもの」(メガラ学派)であり、もう一つは「師の論を見たもの」(犬儒学派)であると言う(前掲全集、第五巻三二頁)。ちなみに、「完全なソクラテス学派」はプラトンのみである。シュヴェーグラー哲学史のドイツ語原文は一八六〇年に公刊された *Geschichte der Philosophie im Umriß* である(初版は一八四八年刊)が、その三七頁にdie unvollkommenen Sokratikerという言葉が見られる。(彼が一八五九年に公刊した *Geschichte der griechischen Philosophie* にこの言葉はない。)ただし、この言葉はシュヴェーグラーが初出ではない。それ以前の一八四六年刊のEduard Zeller, *Die Philosophie der Griechen*, 2.Theilにすでにdie unvollkommenen Sokratikerという表記がある。なお、ツェラーによる一八八六年刊の *Grundriss der Geschichte der griechischen Philosophie*. 2. neu durchgesehene Aufl. の九八頁にdie kleineren sokratischen Schulenという言葉が見られる。安倍能成が記した表現と若干異なるが、ここにようやく「小ソクラテス学派」のルーツを見ることができる。(シュヴェーグラー哲学史第一四版は、日本で教え大きな影響を及ぼしたケーベ

ルによる改訂版だが、これにも die unvollkommenen Sokratiker と記されている。レクラム文庫版を邦訳した谷川徹三と松村一人による岩波文庫版では「小ソクラテス学派」と訳されているが、ドイツ語原文はやはり die unvollkommenen Sokratiker である。）

横道に逸れ過ぎた。元に戻ろう。先に確認したように、円了がソクラテスを四聖の一人として選んだ理由の一つは、ソクラテスが古代ギリシア哲学の「中興の主」だからであった。中興に意味があるのは、「前歴史を統一し、また後歴史を開成したる」ものだからである。『円了随筆』（一九〇一年）では、四聖ともに「以前に種々の哲学」あるのを「総合して新世紀を開」いたこと、「前後に各哲学の開展」があって、四聖はこれらの中間にあって「扇面のカナメ」をなしていることが指摘されている（24:108）。井上円了の哲学思想に多少は親しんだ者であれば、このことの意味を推察することはさほど難しくないであろう。というのも、井上円了の哲学を仮に一言に集約するならば、それは「円満完了の哲学」であり、「相含論」だからである。円満完了の哲学とは、なにごとにも偏らずに議論を深めて全体を総合的に捉えることを言い、相含論とは、『哲学新案』（一九〇九年）によれば、一元論でも二元論でも多元論でもなく、唯物唯心いずれでもなく、経験理想、懐疑独断、無窮一瞬、輪化説因心説、等々のいずれでもない「これらの諸論諸説を総合集成した」（1:401）理論を言う。これを歴史上に見出そうとするならば、ヘーゲルのように「哲学史の終わり」つまり過去の哲学史を総括する現在の「私」に行き着くかもしれないが、そうした立場を自覚的に目指した「過去の人」となると、歴史の前後の中間に位置する「扇のかなめ」つまりは「中興」の主ということになるであろう。だが、古代ギリシアに限っても、そうした中興の主はソクラテス以外にもいるのではないか。ソクラテスは何も書き残しておらず、過去の哲学諸説を収集・

整理し、後世につなげたという意味ではアリストテレスのほうが適格ではないか。しかし、そうした判断を覆すものがソクラテスにはあるとしたら、それは、先に言及したように、「哲学」に対する捉え方にあるのではないだろうか。

三　知徳完備の人としてのソクラテス

井上円了のソクラテス理解は「知徳完備の人」に尽きると言って過言ではないであろう。それほどにこの規定は円了の著作の各所に見出せる。

『哲学要領』前編につぎのように書かれている。長いが引用する。

> ソクラテス氏は、主として人の知識思想を論究して始めて倫理学の基を開く。故にその学、道徳をもって諸善行の基本とし、その純徳の完体これを神と名付く。すなわち諸善諸行の主宰なり。その徳の我人の身体にあるものこれを心霊とす。故にその神の本体は終始生滅することなしという。しかりて氏の道徳を定むるに三種あり。曰く知識、曰く正義、曰く啓信なり。知識もって我人の自身に対するの本分とし、正義もって他人に対するの本分とし、啓信をもって天神に対するの本分とす。およそ氏の哲学はもっぱら人心の性質を審定し、人をして本来有するところの知徳の本体を開発せしむるにあり。故に氏は知徳一体を論じて人の徳は知識なりという。また人の務るところ知識を発育するあるゆえんを論じて、人の幸福は知識に外ならずという。(1:118-119)

ソクラテス以前の詭弁学派は主観的推理に基づき「客観的の考証」に欠ける。ソクラテスはこの弊を矯正したが、彼が重んじた「客観」はこれまでの自然学のそれではない。円了は西洋古代哲学を三段に分け、万有哲学時代、人間哲学時代、宗教哲学時代とし、ソクラテスは「人間の知識および道徳を哲学問題の中心として論じた」(2:47-48)がゆえに人間哲学時代に属すると言う(『通俗講談言文一致哲学早わかり』一八九九年)。万有哲学時代とは、タレスからソクラテス以前までの「世界万有の起源を論じた」時代を指す。ソクラテスが語るところによると、自分もかつて若いころは自然学を学んでいたが、それが自分には「生来不向き」と悟り、「原因探求の第二の航海」に出て「言論において事物の真理を研究する」ことにしたと言う(プラトン『パイドン』45-48)。したがって、ソクラテスが求める「客観的の考証」は右の引用に見られるように、あくまでも倫理や道徳に関するものである。円了最晩年の著作『奮闘哲学』(一九一七年)にはつぎのような格言韻文調の講話が残されている。

桃かスモモか知らねども、ソクラテスの哲学は、学びの庭に三春の、錦まといて出でにけり、広き世界の中心は、天体ならで人にあり、人の人たる道をすて、天地の元を争うは、首尾転倒の沙汰なりと、タレス以後の哲学の、迷いの霧を払い去り、これと同時に蛇足なる、詭弁の学を打ち破り、知識の花をとりきたり、倫理の月を回らして、人の心の光明を、あまねく世には知らしめぬ、かくて知徳の一体を、説きて知識の門内に、倫理の道を開きたる、師の説いかんと門弟の、中に争論湧き上がり、主苦主楽の極端の、倫理説さえ起こりたり、ここにプラトン出藍の、才と学とを携えて、哲学海の深底を、探りて得たる理想の理、これを根拠と定めてぞ、世界の元と人倫の、目的までを示しける、……(2:243)

天体自然ではなく倫理の道を知識によって開いたことに、円了はソクラテス哲学の意義を見出している。ソクラテス以後に争論が湧き起こり混乱があったが、それは倫理や道徳において「知識の花」である「客観的な考証」が貫徹されなかったことに由来する。これはけっしてソクラテス以前に流行した詭弁を弄することを意味しない。そうではなく、ソクラテスに見倣って、「死書を捨てて活書を読み」「活学を修むる」（2:222）のでなければならない。ソクラテスは、万有の哲学である自然学を離れ、「野にある草木はわれになんらの知識をも与えぬ」と語り、「市場や公園に集まれる人を見て学問とせられた」（ibid.）、と井上円了はソクラテスの活学精神を讃える。ソクラテスの生き方そのものがまさに「知徳完備」であり「知徳兼全」であったと円了は理解する。『哲学一瞥』（一九一三年）でも、ソクラテスを紹介し尊崇するのに、彼のこうした知徳完備の生き方が強調されている。

> 中年以後に至り、始めて人を教育せんことを志し、毎日市場、工場、公園のごとき多数衆人の集まる所に至り、老弱貧富を分かたず、諄々として訓誨し、すこしも倦むことなかったと申す。（2:75）

とは言え、繰り返しになるが、ソクラテスは活学をあくまでも活書として、言い換えれば、倫理や道徳を知識の問題として捉えた。円了は右の引用に続けてつぎのように語る。

> その学説は知識を本とし、知すなわち徳なることを唱え、知りて悪をなすは知らずして悪をなすに勝るとまで申しておる。（2:76）

『円了講話集』（一九〇四年）で円了は、善悪の標準を知識とする者としてソクラテスの名を挙げる（25:588）。理想を標準とするのがプラトン、君主の命令とするのがホッブズ、天賦の良心とするのがハチソン、その他、自利、快楽、道理、等々と種々あるが、ソクラテスは知識の有無が善悪の標準となると考えたという。したがって、「知りて悪をなす」ほうが「知らずして悪をなす」より勝ると言う。この言葉は、円了によるシュヴェーグラー哲学史のノートに見られる。そこで円了は、Nay more, whoever knowingly does wrong is better than he who does so unknowingly と書いているが、これは前掲のシュヴェーグラー哲学史英語訳からそのままの抜粋である（p.51）。この一節のルーツは、プラトンではなくクセノフォン（『ソークラテースの思い出』第三巻第九章）である。「彼〔ソクラテス〕は正義をはじめその他のすべての徳も智であると云った。」（佐々木理訳、岩波文庫、一六〇頁）

四　ソクラテスの「知」

ここで気になるのは、「知」という言葉がもつ意味の幅と深さである。「知徳同体」と円了がシュヴェーグラー哲学史からの抜粋の行間に記した際の「知」は Knowledge である（本年報第一九号、二二九頁参照）が、ソクラテスが「徳は知である」と言う場合の「知」は sophia（sapientia 智）であって episteme（scientia 知識）ではない。そこでシュヴェーグラーはこれを knowledge, wisdom, intelelectual discernment（ドイツ語原文では Wissen, Weisheit, Einsicht）と三種の知を並記した。さらに彼はこれを a clearly understood recognition of the notion（ein aus klarbewußter Erkenntniß des Begriffs「概念の明白に理解された認識」）と言い換えている。つづく言葉でさらに補えば、徳であるような知とは、「たんなる内的な力や才能でも、器械的に求められた力や才能

でもない」。

シュヴェーグラーはさらに続けて、Ohne Einsicht handeln と書いているが、Einsicht すなわち「洞察」が perception と英訳されているのには疑問を覚える。「洞察なしの行動」は、カントの言う「理論なき実践」と同様にナンセンスであり、逆に Mit Einsicht handeln（洞察をともなう行動）は確実に目的に至るというのは容易に理解できる。クセノフォンが紹介しているように、ひとは善を知ってそれを行わないことはできないとソクラテスは考えたという話とつながる。しかしこれが perception だと、「知りて悪をなすは知らずして悪をなすに勝る」の意味が変わり、ヘーゲルの言う「犯意なき不法―詐欺―犯罪」（『法哲学綱要』八四以下）のうち、犯罪すなわち能動者受動者双方が不法とわかっているほうが、その双方が気づかずに不法を犯すよりも良いということになりかねない。だが、不注意より強盗殺人のほうが良いと、ソクラテスが言っているわけではない。

のちにアリストテレスが整理したように（『形而上学』『ニコマコス倫理学』等参照）、「知」と一言で言っても、制作知（techne）、実践知（phronesis）、理論知（episteme ないし sophia）があり、直観知（nous）もある。これら多様な知を区別せずに何でも知っていれば徳になると、ソクラテスが言っているわけでもない。

前掲の『円了講話集』で円了は、ソクラテスが知を善悪の標準としていると述べたあと、さらにつぎのように続けている。すなわち、仏教も知識標準説と言われるが、ソクラテスのそれと仏教のそれとでは「天地の相異」がある。その理由はつぎの通りだと言う。

仏教のいわゆる知には有漏、無漏の二種ありて、有漏はすなわち世間の知なれば、ソクラテスの知識と同一視して可なるも、無漏智にいたっては出世間の知にして、他学のいまだ唱えざるところなり。（25:589）

ソクラテスに関してのみ言えば、ソクラテスの知は世間知だと円了は言うのである。もっとも、先に引用したように、ソクラテスにとってこれは、「世間知にすぎない」という消極的な話ではない。詭弁論者の主観的推理に比べて、世間知のほうがはるかにすぐれているというのがソクラテスの考えである。円了の言葉で補足するならば、「毎日市場、工場、公園のごとき多数衆人の集まる所に至り、老弱貧富を分かたず」のところで目にし耳にする世間知にソクラテスは活学活書を見出すのである。そのことを前提としたうえで、さらにそれにもかかわらず、その先によりいっそう深い知がある、と円了は言うのである。『哲学茶話』でつぎのように語られる。

それ哲学は一種の別世界にして、その中に天地あり、日月あり、風雨あり、山海あり。釈迦の知はそのいわゆる日月なり。孔子の徳はそのいわゆる雨露なり。ソクラテスの識はそのいわゆる山岳なり。カントの学はそのいわゆる海洋なり。その知はわれを照らし、その徳はわれを潤し、その識はわれを護し、その学はわれを擁し、わが父となり、わが母となり、君主となり、師友となり、日夜われを愛育撫養せり。(2:111)

同じく「知」と言っても、釈迦の知、孔子の徳、ソクラテスの識、カントの学、それぞれにその意味するところは異なる。ソクラテスの識は、山岳であり、われを護る、と言う。非常に難解な比喩であるが、カントの学と比較すれば理解可能だろうか。カントの学はあくまでも二元論的な悟性判断であり、さらに限界を自覚したうえでの理性的な判断に基づく。その意味で、カントの「知」すなわち「学」は、ギリシア語で言えば episteme としての「知」ではないだろうか。しかし、自然学研究を「生来不向き」と悟ったソクラテスにとって、同時に「徳」であるような「知」はあくまでも sophia である。

『哲学要領』前編にはつぎのような一節がある。

> ギリシア哲学は東洋哲学中インドとその性質を同じうし、形而上の理論は両者の共に長ずるところにして、形而下の実験は両者の共に欠くところなり。その欠点を補うて完全を得たるものはひとり近世の哲学あるのみ。(1:128)

sophia は形而上の知であるが、episteme が十全に発達するのは近代であり、episteme を哲学的に基礎づけたのはカントであると言ってまちがいないであろう。円了のこの言葉は、釈迦とソクラテスとカントを四聖に数える布石となっているのではないだろうか。episteme と sophia が揃ったところでさらに足りないのは phronesis すなわち孔子の徳である。だが、以上で見てきたように、ソクラテスの求めた sophia には phronesis も含まれていたはずである。たんなる知ではなく同時に徳であるような知こそソクラテスが求めたものであり、井上円了が仏教徒ながら西洋哲学史を学んで求めたものもここにあった。

五　円了によって改竄されたソクラテス

最後に、井上円了が学生時代に作成した学習ノート(「稿録」)を読もう。ここにシュヴェーグラー哲学史からの抜粋があり、ソフィストとソクラテスの違いについて、つぎのようにノートされている。

「もっぱら有限で経験的で利己主義的な主観性」と「個人の偶然的な意志や判断」とを元にするソフィストに対して、ソクラテスは「自由意志と自己意識の原理を完成」させ、「客観的意志と合理的思想」を中心に据えた。

ソクラテスによれば、理性的な存在者にとって自らの思想は普遍性と客観性を持っており、そうであるかぎりで、その主観性は「普遍的な主観性」である。「人間は万物の尺度である」というソフィストの言葉を使って言い換えれば、「普遍的に思考する合理的な人間」だけが万物の尺度たりうる。

ここでは、ソフィストとの違いを際立たせるかたちでソクラテスの客観的で合理的な思考が強調されているように読める。したがって、episiteme の要素がここで強く打ち出されているように見える。だが、この叙述のうち、どこまでがソクラテスの考えであり、どこまでがシュヴェーグラーの解釈か。あるいは、そこに井上円了の理解が混じっていないか。これを検討しなければならない。もちろん、ソクラテス自身は何も書き残していないので、シュヴェーグラーが指摘するように、ソクラテスの思想を語る際の資料としてクセノフォンから多くとるかプラトンから多くとるかでその理解が大きく異なるが、その問題はここでは問わない。シュヴェーグラーと円了の関係を検討するにとどめる。円了のこのノートはシュヴェーグラー哲学史からの抜粋であるが、円了はシュヴェーグラーの記述をそのまま写し取っているわけではない。

> To complete the principle of free will and self-consciousness into its truth, and to set in the place of empirical subjectivity or ideal subjectivity, objective will, and rational thought, was the task which Socrates undertook and achieved. (下線は円了による)

シュヴェーグラーの前掲の英訳本では次のように書かれている。

To complete the principle of free will and self-consciousness into its truth, and ...〔中略〕... to set in the place of empirical subjectivity absolute or ideal subjectivity, objective will, and rational thought, -- this, now was the task which Socrates undertook, and achieved. (p.38)

途中で引用を省略した数行は円了のノートで省略されている部分である。問題なのは、to set 以下 rational thought までの部分である。これをドイツ語原典と対比させるとさらに違いが明らかになる。

... an die Stelle der empirischen Subjektivität die absolute oder ideale Subjektivität, das objektive Wollen und das vernünftige Denken zu setzen, ... (S.32)

ドイツ語原文を邦訳すると、「経験的な主観性の代わりに、絶対的すなわちイデア的な主観性を置き、客観的な意志と理性的な思考を置くこと」となる。英訳とドイツ語文はさして異ならないが、井上円了はノートする際に決定的な間違いを犯している。シュヴェーグラーは absolute oder ideale (absolute or ideal) と書いているが、円了はこのうち absolute だけを省略したために or が empirical subjectivity or ideal subjectivity という使われ方になってしまい、「経験的主観性または観念的主観性」というようにこの両者が同格となって、それの「代わりに」客観的な意志と合理的思想とを置く、という話になってしまっている。これはこれで非常にわかりやすい解釈ではある。だが、シュヴェーグラー自身の場合は、ドイツ語の定冠詞の格変化から明らかなように、「経験的主観性の代わりに絶対的すなわちイデア的な主観性を」と書かれており、ソフィストらによる「経験的主観性」に対

してソクラテスによる「絶対的主観性すなわちイデア的な主観性」が対置される話になっている。そして、こうした絶対的主観性が客観的な意志や理性的な思考と同格に置かれているのである。

円了のノートでは、右に引用した文章のあとに、英訳で一四行の省略がある。略されたその部分にInstead of empirical subjectivity, that absolute or ideal subjectivity should be made the principle（経験的な主観性の代わりに、あの絶対的すなわちイデア的な主観性が原理とされるべきである）と書かれている。これと、先に見た箇所とは文脈が通じている。円了のようなノートの仕方では、この一文がつながらない。あるいは矛盾する。だからここをカットしたのだろうか。

このあと円了のノートはつぎのように続く。

... Every thinking being has the consciousness that waht he holds for right, duty, good, is not merely so to him, but that it is so also for every rational being, and that consequently his tought has the character of universality, a universal validity, in a word, objectivity. Therefore, so far as we are a rational thinking being, our subjectivity is a universal subjectivity. This is , as opposed to that of Sophists, the standpoint of Socrates, and on this account there begins with him the philosophy

Objective thought. What Scrates could do in contradiction to the Sophists was ....

Therefore 以下の一文は、シュヴェーグラーの原文では、さきに円了が省略した箇所にある。それを円了は意図的にここに挿入する。したがって、Therefore という接続詞も、This is という指示語も、シュヴェーグラーの

原文とは、係り受ける言葉が異なる。円了のノートにある and on this account there begins with him the philosophy という一節も文脈がつかめない。だが、シュヴェーグラーの原文を見れば容易に納得が行く。円了のノートでは philosophy のあとに空白があり、改行して Objective thought という単語が置かれているが、英訳では and on this account there begins with him the *philosophy of objective thought.* と書かれている（イタリックは原文のまま）。円了のノートによれば、「ソクラテスの思想の特徴は客観性にあるがゆえに、われわれが合理的思考存在であるかぎり、われわれの主観性は普遍的主観性である。これがソクラテスの立場であり、その意味で哲学はソクラテスとともに始まる」という話になり、支離滅裂である。一方、シュヴェーグラーの原文では、「ソクラテスの思想の特徴は客観性にあり、これがソクラテスの立場である。その意味で客観的思想の哲学はソクラテスとともに始まる」となっており、理路整然としている。

円了はいったいなぜ、このような手の凝った、あえて言えば改竄したノートを残したのだろうか。円了はシュヴェーグラーの原文を書き換えてノートし、「イデア的主観性」をソフィストの「経験的主観性」と同一視し、それに客観的意志と理性的思考を対置させた。それは、主観性に客観性を対置する点でシュヴェーグラーのソクラテス理解に準じるが、シュヴェーグラーはその前に、ソフィストがそれ以前の自然哲学者と異なり「主観性の原理」に立ったことを「正しい」と評価し、そのうえでソフィストの主観性は「経験的で利己主義的」にすぎず、ソクラテスが主観性を普遍的なものにした、と書いている。そして、ここがやや複雑なのだが、ソクラテスの普遍性は客観性であり、彼は「普遍的で客観的な精神の原理」に立っている、とシュヴェーグラーは述べる。言い換えれば、ソクラテスにおいて主観性は「客観的主観性」である。形容矛盾を犯しているこのいわば弁証法的概念のために円了は混乱したのではないか。だが、円了が哲学の聖人として尊崇するソクラテスは「中興の

主」として、まさにこの主観性と客観性を同時に備える人物でなければならなかったのではないだろうか。知の客観性と徳の主体性(3)を完備する者として。

【註】

(1) 齋藤繁雄編『井上円了と西洋思想』東洋大学井上円了記念学術振興基金、一九八八年、八頁と一〇頁。

(2) 円了著作からの引用はすべて全集からとし、記号で表記する。たとえば 2:102 は全集第二巻一〇二頁からの引用である。

(3) Subject を実践的意味を込めて「主体」と訳すのは、知る限りでは吉田静到「人格的唯心論について」(一九一〇年)が初出である。石塚正英・柴田隆行監修『哲学思想翻訳語事典』(論創社、二〇〇三年)所収の拙稿「主観と客観・主体と客体」の項参照。